

Loris Malaguzzi の幼児教育思想に関する研究

— 「子どもたちの 100 の言葉」というメタファーに焦点を当てて —

A Study on Loris Malaguzzi's thought of early childhood education
:Focusing on 'The hundred languages' as a metaphor

濱 田 真 一*

HAMADA Shinichi

要約：本研究はレッジョ・エミリア市（以下レッジョとする）の幼児教育実践の理論的リーダーであった人物、ローリス・マラグッツィ (Loris Malaguzzi) の幼児教育思想について「子どもたちの 100 の言葉」（伊 / 英 I cento linguaggi dei bambini/The hundred languages of children）というレッジョ・アプローチを象徴するメタファーに焦点を当てて明らかにするものである。「子どもたちの 100 の言葉」（以下、「100 の言葉」とする）は、子どもが主体として教育に参加する権利を表明するメタファーである。また「100 の言葉」は、そのような幼児教育実践の内容を象徴するメタファーでもある。このメタファーの生成は、ジャンニ・ロダーリ (Gianni Rodari) との交流によってマラグッツィが得たインスピレーションに端を発してしると思われる。ロダーリはすべての人が「言葉」を持ち、「言葉」を用いることに民主的な響きを見出していた。

キーワード：ローリス・マラグッツィ (Loris Malaguzzi), レッジョ・エミリア (Reggio Emilia), 「子どもたちの 100 の言葉」 (I cento linguaggi dei bambini/The hundred languages of children)

I はじめに

ローリス・マラグッツィ (Loris Malaguzzi) はレッジョ・エミリア市の幼児教育実践であるレッジョ・エミリア・アプローチ（以下レッジョ・アプローチ）の創始者の一人で、レッジョ・アプローチの理論的リーダーであった人物である。

1945 年に Cella 村にて出会った母親たちと共にその土地に学校をつくって以来、マラグッツィは常にレッジョ・アプローチの構築に影響を与え続けた。その過程でいくつものプロジェクトが生まれた。近年、日本の保育においても子どもたちの「協同的な学び」の必要性が問われ、カリキュラムにプロジェクトを位置づける議論や実践が行われている。プロジェクトは保育者主導でも子ども本位でもない、両者が主体となる協同的な学びを創る手がかりとなるものである。

レッジョ・アプローチはプロジェクトを中心とした特徴的なカリキュラムで注目を集める。レッジョのカリキュラムは、イマージェント・カリキュラム (emergent curriculum) と呼ばれることがある。イマージェント・カリキュラムについてレーラ・ガンディーニ (Lella Gundini) は「保育者たちは大まかな目標を示し、活動や企画がどちらの方向へ進むかを推測し、適切な準備を¹⁾し、そのうえで、「子どもたちの活動を観察した後、自分たちの観察結果を比較し合い、いっしょに検討し、解釈して、子どもたちの探求と学びにおいて彼らに何を与え、どのように支えていくか、子どもたちと共有することを選択²⁾」するものであると述べている。木下龍太郎によるとイマージェント・カリキュラム

* 教育学研究科修士課程学校教育専攻 2 年

という言葉に代わって「『ドキュメンテーションを通して構成される予測型カリキュラム』という説明的な言い方がなされてもいる³⁾」ということである。

プロジェクトのように子どもと保育者が協同で学ぶ保育を行う実践においては、保育の理論は常に実践と結びつきながら形成される。保育実践の理論化は実践記録などを手がかりに、現場で保育に従事する保育者と、研究者との協同で行われるものであるが、それを模倣すればいいというような支配的な理論がつくられないように慎重に行われるものであり、実践者と研究者の関係は理論を構築することにおいて対等であることが目指される。レッジョ・アプローチでは、教師たちはドキュメンテーションを手がかりに、常に実践と理論を相互に構築してきた。ガンディーニは、マラグッツィが「教師は同時に研究者になるべきである⁴⁾」と言っていたことを指摘している。

マラグッツィの幼児教育思想は、レッジョ・アプローチに影響を与え続けてきた。マラグッツィは多くの理論から学びながらもそのうちの何かに傾斜することはなく、自分たちの実践の中で確かめながら、思想を形成している。マラグッツィは「私たちの理論はさまざまな領域から導かれ、私たちはそれらの理論を調整するとともに、私たち自身の手で起こる出来事を調整して⁵⁾」いるが「教育現象のすべてを総括するような統一的な教育理論は存在し⁶⁾」ないと述べている。マラグッツィは数々の理論を、「そのときレッジョの保育に求められる理論」のために摂取し、実践で確かめながら学び、レッジョの理論を構築してきた。鳥光美緒子は、マラグッツィは数々の教育学や心理学の理論に触れながらも「移り気なほどに、いろいろな理論を験して⁷⁾」おり、彼は「自分の身体で験してそしてそれによって、その理論の何が残るのか、何が身体をとおすことで変化するのかを確かめていく⁸⁾」と述べている。マラグッツィの幼児教育思想はどのように形成されたのか。その過程を見ることで、子ども、教師、保護者全てが主体となって構築する保育実践において、その理論と実践の構築はどのようになされていくのかということに対する、一つの具体的なモデルが得られることが期待される。

「子どもたちの100の言葉」(伊/英 I cento linguaggi dei bambini/The hundred languages of children)は、レッジョ・アプローチを紹介するときしばしば用いられる言葉である。マラグッツィの詩「でも、100はある」(Invece il cento c'e)にもこの言葉がある。1980年代、マラグッツィらがレッジョ・アプローチの展覧会を準備している時期に整えられたこのメタファーは、レッジョ・アプローチの経験を特徴付ける役割を果たした。

「100の言葉」はレッジョ・アプローチを象徴するメタファーであると言え、そのメタファーの生成過程にはマラグッツィの教育思想の深い影響が想像される。本研究では、「100の言葉」の生成をめぐる過程にどのような背景があったのかということを見ることと、「100の言葉」に対するいくつかの説明または解釈を整理することを課題としている。

II 民主的な教育実践を象徴する「100の言葉」

1. レッジョ・アプローチを象徴する「100の言葉」

「100の言葉」はレッジョ・エミリアの民主的な幼児教育実践を象徴するメタファーである。このメタファーはレッジョ・アプローチの展覧会や、レッジョ・アプローチに関する文献のタイトルになったり、マラグッツィの詩の中に出てきたりする等、レッジョの幼児教育実践を紹介する際にしばしば用いられる。

マラグッツィは「教育現象のすべてを総括するような統一的な教育理論は存在し⁹⁾」ないとしながらも、「実際には、活動的な教育の理論や経験から直接導かれ、子どもや教師や学校や家族やコミュニティについての特殊なイメージを実現する、レッジョ・エミリアにおける私たちのアプローチの

強固な核¹⁰」を持っていると述べている。「100の言葉」はマラグッツィが「特殊なイメージを実現する、強固な核」と表現するような、経験から導かれた教育観、文化、子ども観といったレッジョの哲学を表象するものであると考えられる。

2. 「100の言葉」はどのように解釈されてきたか

(1) 「100の言葉」を持ち、「100の言葉」を用いることの権利の表明

「100の言葉」に対するいくつかの説明や解釈から、「100の言葉」の表すものが見出せる。

「100の言葉」は子どもが学びの主体となる権利を持つ存在であることを表明するものであると言えるだろう。たとえば、カルリーナ・リナルディ (Calrina Rinaldi) は「100の言葉」に関連させて「どのように2つの言語 (two languages) が特権的であったのか¹⁴」ということについて述べている。「2つの言語」とは、話し言葉と書き言葉のことである。このリナルディの意見を受け、ピーター・モス Peter Moss らは「わかりやすい言葉 (language) —特に話し言葉と書き言葉—の優位性ゆえに、それらを流暢に扱える人々は「聴くこと listening」の特権が与えられることになる¹²」と述べている。「100の言葉」における「言葉」は、100にとどまらず、無数の「言葉」を指している。それは話し言葉や書き言葉だけではなく、アートによる表現や、しぐさ、表情など様々である。モスらは、子どもを社会における参加者であると考えるとき、「聴くこと listening」の実践において「子どもたちの100の言葉」と「対話」と「解釈」の関係性を理解することが課題としている。

ジョージ・フォアマン (George Forman) らによると、「子どもたちの100の言葉」というフレーズは「何かに向かう一般的な態度を表現するために、子どもたちが彼らの母国語を使える方法は百通りあると言っている¹³」ということである。またフォアマンらは「もっと字義通りに言えば、このフレーズは、教室の文化が許しさえすれば、子どもたちが使用できる前言語として認定される百の異なるシンボル体系があるということの意味している¹⁴」と述べている。

子どもは「2つの言語」に関して流暢とは限らないが、豊かな「100の言葉」を持っている。マラグッツィたちはそれを認め、子どもが自由に用いて教育、社会に主体として参加する権利を表明している。

(2) 「100の言葉」が表象する学びの実践

もっとも、子どもが権利を持つ存在であることを象徴しているという解釈だけでは「100の言葉」を捉えることはできない。

リナルディは前項のような議論を展開する一方で、「100の言葉」の魅力は「多様性が、異なる言葉同士での対話を通しての再度の対話を助けてくれる¹⁵」ことであるという考えを述べている。リナルディによれば「そのことは、その独自の特異性への気づきへ向かい、概念化を支えることと、他者への尊重に関して互いの言葉を助ける、相互の連携、相互依存性を意味する¹⁶」ということである。

ここで「異なる言葉同士の対話」と言われているのは、リナルディの例によると「絵を描くとき、自分自身のグラフィックな言語 (graphic language) だけでなく、バーバルな言語 (verbal language) を主張することが¹⁷」できるということである。レッジョ・アプローチにおけるプロジェクトでは、子どもたちは事物に対する理解を深めるために、絵画や音楽、造形、また話し合いなど、多様な「異なる言葉」を用いて対話することができる。また、それらの言葉はメモ、ビデオ、ポートフォリオ、アート作品などこれも様々な形態のドキュメンテーションによって記録され、いつでも学びに再訪できるようになっている。

(3) レッジョ・アプローチの経験の特徴付け、象徴するものとしての「100の言葉」

前項までに述べたように、「100の言葉」は、子どもが主体として教育や社会に参加する権利を持

つということの表明である。そして、それと同時に、その権利を保障したレッジョ・アプローチの幼児教育実践における子どもの具体的な学びの姿を、象徴的に表したのものである。つまり「100の言葉」は、子どもの声を聴きとりながら教育を構築するもの全てが主体となるレッジョの民主的な幼児教育実践の経験について、権利の表明とその具体的な実践の姿とを同時に象徴しているメタファーであると考えられる。

Ⅲ 「100の言葉」というメタファーの起源

1. レッジョの経験を意味づける理論としての発展

レッジョにおいて「100の言葉」がよく用いられるようになったのは、展覧会が開催されるようになった1980年代以降のことである。リナルディは1980年代初頭のことを振り返り、以下のように述べている。

(…)1980年代初頭、ローリス・マラグッツィは「100の言葉」の理論を発達・精練させていた。「100の言葉」の理論は、これまでのレッジョの幼児学校・保育所における経験を特徴付けるものであった。さらに「100の言葉」の理論は、レッジョの幼児学校・保育所における経験の未だ曖昧な部分を意味づける可能性を秘めたものであった。

わたしたちはマラグッツィと一緒に、まだ名前もつけられていなかったその理論をデザインし、提示する準備をしていた¹⁸。

1980年代は、後に「子どもたちの100の言葉」というタイトルが冠されることとなった（初期の展覧会のタイトルは「視線が壁を越えれば L'occhio se salta il muro」）レッジョの展覧会が世界各地で開催されるようになった時期である。外部と交流する機会が増えたため、マラグッツィたちはレッジョの実践の経験を特徴付ける必要があった。上記のリナルディの言葉から、「100の言葉」は1980年代初期、レッジョの経験についての議論や理論化が重ねられた上に誕生したものであると考えられる。

2. 1972年のインスピレーション：ジャンニ・ロダーリのセミナー

(1) セミナーのスローガン「ことばの使い方のすべてをすべての人に」

しかしながら、「100の言葉」をマラグッツィがひらめいたのは、1970年代初頭のことであった。「100の言葉」の起源は、作家、詩人、ジャーナリストとして当時名を馳せていたジャンニ・ロダーリ (Gianni Rodari) とマラグッツィの交流の中に見出すことができる。

二見素雅子は「100の言葉」の発端を以下のように述べている。

1972年3月、ロダーリ (Rodari, Gianni) がマラグッチとともにレッジョ・エミリア市公立幼児保育園の教員のためにセミナーを5日間行った。この時、彼が「子どもは百の言葉をもっている」「Il bambino ha cento linguaggi」という、今日レッジョ・エミリア教育の展示会の表題となっている言葉を初めて使った。¹⁹

このセミナーは、「ファンタジー学」についてのものであった。ロダーリはそこで、お話作りの方法など自らの「商売道具」を披露し、想像力の教育について特論を展開し、レッジョの教師た

ちと議論した。そのセミナーのスローガンは「ことばの使い方のすべてをすべての人に」というものであった。ロダーリは「《ことばの使い方のすべてをすべての人に》、これこそ素晴らしい民主的ひびきをもったすばらしいモットーだとわたしは思う。だれもが芸術家であるからではなく、誰もが奴隷ではないからである²⁰」と述べている。

ロダーリは、ファンタジーと想像力（イマジネーション）は区別されず、創造的な想像力は誰もが備えているものとしている²¹。ロダーリはまた、創造性について以下のように述べている。

《創造性》は《異なる思考》、すなわち、経験の図式（シェーマ）を連続的に打ち破ることのできる思考と同義である。《創造的》とは、つねに仕事をし、つねに疑問を投げかけ、他人が十分な答えを見出したところに問題点を発見し、（父親からも先生からも社会からも）独立した自分なりの判断ができ、法典（コード）化されたものを拒否し、順応主義に毒されることなく事物や概念をあやつることのできる精神をさす。創造の過程にはこうした特性がすべてあらわれる。そして、この過程は—よくよく聞いてほしい！—あそびの性格を持っているのだ²²。

ことばを持ち、ことばを使うということは、ロダーリにとっては創造的想像力を働かせて、順応主義にとらわれないで自由に生きるための手段であった。

(2) ロダーリにとっての方法：ファンタジーの二項式

ロダーリの方法は、「ファンタジーの二項式」に見られるように、言葉を同質の文脈から解放し、新しい概念を創造することであった。「ファンタジーの二項式」においてはたとえば「馬」と「たんす」といったような関連性の薄い異質の言葉が選択され、そのぶつかり合いによって物語が生まれる。

ロダーリがしばしば言及しているように、これはヴィクトル・シクロフスキー（Виктор Борисович Шкловский）が提唱した「異化」の方法と同様のものである。シクロフスキーの場合「異化」は芸術の目的として捉えられていたが、ロダーリはこの方法を、すべての人にとっての想像力の教育の方法として捉えている。

ロダーリは言葉を自由に操ることによって、すべての人が創造的想像力を発揮し、常識や規範、同質の文脈から解放され、新たな概念を生み出すことができると信じていた。Alfredo Hoyuelos Planillo は「マラグッツィは、常識や規範を乗り越えることを好み、また、言葉を創造的に用いることを楽しみ、言葉を駆使して、あっと言わせるようなメタファーを生み出すことが好きだった²³」とし、「それゆえマラグッツィは、ロダーリとの対話に心躍らされた²⁴」と述べている。

ロダーリとマラグッツィの交流で生まれたアイデアは、すべての人の「言葉」の自由な使用で、枠にとらわれない新たな文化、価値、概念を生成していくことができるというものであった。

3. レッジョにおける教育の経験と「言葉を持つ」というメタファーとの共鳴

ロダーリとの交流の中で、マラグッツィは今日の「100の言葉」の着想を得たと考えられる。「ことばの使い方のすべてをすべての人に」というスローガンにおける「ことば」に込められた「民主的な響き」は、レッジョの幼児教育実践が持つ精神と共鳴したと考えられる。

秋田喜代美は、「それ（ロダーリのセミナー：筆者注）から30年、レッジョ・エミリアの教育実践は、物語という言語経験のみならずより多様な感覚経験において、ファンタジーへむかう現実時間の解体と構築の不変数を見極め、そのための具体的な道具を数多く準備している²⁵」と述べている。

ロダーリにとって「ことばの使い方」の訓練の具体的な方法は、文字通りの「言葉 word」を用いることが主であった。マラグッツィたちはロダーリとの交流で「言葉を持つ」また「言葉を使う」ということに、すべての人が創造的想像力の獲得し、民主的で自由な生き方をすることの表明を見た。レッジョ・アプローチにおいては「言葉」は話し言葉や書き言葉にとどまらず、アート表現など様々な形態を持つが、それはロダーリが得意としていた方法だけにとどまらないということであって、ロダーリが提示した「言葉を持つ」こと「言葉を使う」ことと共通の営みがなされている。ロダーリが「言葉」を持つことに込めた意味は、規範や文化の奴隷にならないで、自分の言葉で世界を理解し、言葉を用いることで世界する主体であることであつた。レッジョ・アプローチにおいて子どもたちは「100 の言葉」を用い、世界を理解し、学びの経験をつくりだす主体である。

IV おわりに

レッジョ・アプローチにおいては、大人と子どもの両者が、「言葉」を持ち、共に学びの経験をつくりだす主体となる。レッジョの教師や保護者たちは、子どもの「言葉」を聴く努力、たとえばドキュメンテーションなどを続けてきた。子どもも大人も互いに「言葉」を持つことが、抑圧や伝統、規範に屈しない術であつたからと考えられる。「100 の言葉」を持つ存在であると認めたとき、子どもも大人も尊敬しあう関係になるのではないだろうか。

前述したように「100 の言葉」は、レッジョの経験による具体的な子どもの姿や学びの経験を表しながら、子どもの権利の表明をするメタファーである。「言葉」というメタファーが用いられたのはロダーリからのインスピレーションがあつたからと思われる。「すべての人が言葉を持つこと」はレッジョにおいては子どもが「100 の言葉」を持ち、教育や社会における主体となる権利の表明となり、「言葉の使い方のすべて」は、レッジョにおいては子どもが「100 の言葉」を用いて、交流し、対話し、学ぶ経験をつくる実践となっている。

註

- ¹ ガンディーニ・L 「レッジョ・エミリア・アプローチの基礎」 ヘンドリック・J 編著（石垣恵美子，玉置哲淳監訳）『レッジョ・エミリア保育実践入門』、北大路書房、2000、p. 15
- ² 同上、p. 15
- ³ 木下龍太郎「イタリアの保育—レッジョ・エミリアを中心に」 亀谷和史，宍戸健夫，丹羽孝編『現代保育論』、かもがわ出版、2006、p. 185
- ⁴ ローリス・マラグッツィ「歴史と思想と基本哲学」 エドワーズ・C., ガンディーニ・L., フォアマン・G. 編（佐藤学，森眞理，塚田美紀訳）『子どもたちの 100 の言葉—レッジョ・エミリアの幼児教育』、世織書房、2001、p. 131
- ⁵ 同上、p. 128
- ⁶ 同上、p. 128
- ⁷ 鳥光美緒子「マラグッツィから学ぶ、あるいは、二項対立を一外部観察に対する内部観察という図式の定式化を含めて—あらゆる二項対立図式を回避するということについて」『近代教育フォーラム』、No. 12、教育思想史学会、2003、p. 158
- ⁸ 同上、p. 158
- ⁹ マラグッツィ前掲書、p. 128
- ¹⁰ 同上、p. 128
- ¹¹ Carlina Rinaldi *In Dialogue with Reggio Emilia*. Routledge, 2005, p. 193

- ¹² Peter Moss, Alison Clark and Anne Trine Kjørholt “Introduction” in Alison Clark, Anne Trine Kjørholt and Peter Moss, ed *Beyond Listening Children’s perspectives on early childhood services*. The Policy Press, 2005, p. 5
- ¹³ フォアマン・G., ファイフ・B. 「デザイン、ドキュメンテーション、ディスコースによって交渉する学び」 エドワーズ・C., ガンディーニ・L., フォアマン・G. 編（佐藤学、森真理、塚田美紀訳）『子どもたちの 100 の言葉—レッジョ・エミリアの幼児教育』、世織書房、2001、p. 387
- ¹⁴ 同上、p. 387
- ¹⁵ Rinaldi, op. cit., p. 193
- ¹⁶ Ibid., p. 193
- ¹⁷ Ibid., p. 193
- ¹⁸ Carlina Rinaldi, “Introduction”. Carlina Rinaldi, Mara Krechevsky, ed *Making learning visible : children as individual and group learners*. project zero, Reggio Children, 2001, pp. 29–30
- ¹⁹ 二見素雅子 「Reggio Emilia 教育 — 成立期の社会的背景を中心に—」 『神学と人文：大阪基督教学院・大阪基督教短期大学研究論集 39』、1999、p. 90
- ²⁰ ジャンニ・ロダーリ（窪田富男訳）『ファンタジーの文法』、ちくま書房、1990、p. 21
- ²¹ 同上、pp. 280–295
- ²² 同上、p. 287
- ²³ Alfredo Hoyuelos Planillo., LORIS MALAGUZZI biografia pedagogica. junior, 2004, p. 83
- ²⁴ Ibid., p. 83
- ²⁵ 秋田喜代美 「レッジョ・エミリアの教育学 幼児の 100 の言葉を育む」 佐藤学, 今井康雄編 『子どもたちの想像力を育む アート教育の思想と実践』、東京大学出版社、2003、p. 83